



ピッポ新聞

2013

6

No.269

編集・発行 子どもの本専門店ピッポ&ピッポ古書クラブ
編集者 伊藤俊男

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

1

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

スイスへいつてきたよ (その7)

狂い出したスケジュール

ツェルマットに来て3日が経った。ここまでは天気に左右されることもなく、日本で立てた計画通りに行動ができた。そう！ぼくの山旅はとても順調だったのだ。(ここまではね…)

きょうはこれからツェルマットの隣の谷にあるサースフエーというところへ行き、アリランホルン(四〇二七メートル)とヴァイスミース(四〇三三メートル)という山に登る予定だ。二つの四千メートル峰へ登るので、



少なくとも一泊はサースフエーにすることにしよう。しかし、今朝から小雨が降っている。ちよつと嫌な予感がする。ツェルマットはマター谷のどん

詰まりにある町で、サースフエーは隣のサーズ谷のどん詰まりにある町なのだ。だから、列車で一旦シュタルデンという駅まで下って、そこからポスト(郵便)バスに乗ってサースフエーに向かうのだ。ホテルを出てツェルマットの駅までは、傘をさすほどでないので濡れながら歩く。

列車とバスの時刻は、昨日駅に調べにいったところ、便利なおことにツェルマットから近郊の有名な観光地までの列車やバスの時刻表が行き先ごとに印刷されて置かれていた。だからサースフエーの場合も、何時の列車に乗ればシュタルデンに何時に着き、シュタルデンでは何時のポストバスに乗ることができ、サースフエーには何時に着くか一目でわかる。帰りもサースフエーを何時のバスに乗れば、ツェルマットに何時に戻れるかがわかる。A4の墨一色の簡単な印刷だけど、これは観光客にはとても便利だ。この後訪れたグリーンデルワルドでも探したが、ここには見当たらなかった。どうやらツェルマット駅の独自のもののようなのだ。

八時三十九分発の列車に乗り込んだ。スイスパスの一等を買っているので、一等車に乗ったのだが、最初はぼく一人で、静かだいいなと思っていたところ、まもなく中国人の団体客がぞろぞろ乗り込んできた。とたんに車内は騒がしくなった。その声高にいき交う中国語は、どうにも感に触るのだ。しばらくはその騒がしさに耐えていたが、我慢できなくなつて、隣の二等車に逃げ込んだ。中国パワー(っ)表現しましたが、この場合はただただやかましかった(っ)を身をもつ

て体験した次第である。

スイスに来て目にする団体客は、圧倒的に日本人ツアーが多いが、中国や韓国のツアーともときどき出会った。同じ東洋人であるが、かれらと日本人ツアーの判別は、しゃべっている言語を聞くまでもなく、遠方からでもすぐわかる。それはツアーを構成している人たちを見れば一目瞭然だった。

日本人ツアーの場合、そのほとんどが中高年で構成されているが、中国や韓国の場合はその構成は家族連れや、若い人もかなり含まれているのである。

日本人ツアーの中高年の構成というのは、自分自身もそうだから、その理由がよくわかる。一般的な日本人は、自分が壮年期だった時代に海外旅行へゆくなど夢でしかなかった。時間やお金が、とても捻出できなかったのだ。子育ても終わり、年金を受給するようになってはじめて少しの時間とお金が自分のことに使えるようになったということではないだろうか。

ところで、スイスの山に登りたいという多くの長年の夢は、時間とお金だけでは実現しないのだ。もう一つ大切な条件がある。その条件とは、四千メートルを超える山に登る体力を有していることだ。

スイスへ来るのに、ぼくにはある意味時間との競争もあった。三浦雄一郎さんのように、八十歳でエヴェレストへ登頂するという人もいるが、あれは特別で、一般人のぼくは、多少なりとも時間が使えるようになった今は、かつて有してい

た残雪の中を一日で上高地から槍の肩まで登ったり、吹雪の中を十時間も縦走したりする体力はすでに失われてしまっている。その意味で、ぼくは時間との競争に負けたのかもしれない。だから、スイスへ来てもハイキングに毛の生えたような山登りしかできないのだ。それでも来てみたかったんだけどね。

話が横道にそれて、怨み節になってしまった。元へ戻そう。

こんな理由で、ツアー客を遠方から見ても、日本人と区別がつかないのである。中国人や韓国人の家族や若者の交じったツアーは、やっぱり彼らが富裕層だからかな？

ロープウエが運休？

シタルデンからバスに乗り換えてサーズフェーに着いたが、ここでもやっぱり小雨が降っていた。バスの終点は、広いガレイジという感じのところだ。まずは売店の人に、観光案内所を教えてください。それはすぐ目の前にあった。ここで今日のホテルを予約し、山岳ガイド組合の場所を聞くつもりだった。

ぼくはアリランホルンには、可能なら今日登りたいとおもっていたのだ。それでなければ、サーズフェーにもう一泊しなければならなくなる。窓口の女性にアリランホルンのガイドをたのみたいので、ガイド組合の場所を聞いたのだ。すると女性は今日はクローズだという。何のことかわからなかったので再度聞いてみた。どうやら

彼女は今日はミッテルアリランへゆくロープウエが天候が悪いためクローズされているので、アリランホルンの登山もダメだと言っているようだ。明日ならロープウエも動くということだった。

ここでホテルの予約だけでもしておけば、その後の多くのスケジュールも少し予定が狂うだけで済んだのだから、このことが、その後のスケジュールの大幅な狂いの始まりであった。

そのあとの彼女の言ったことに気を取られてしまったのだ。彼女はミッテルアリランのロープウエは駄目だが、ホーサスまでのロープウエは動いているという。ホーサスはアリランホルンの次に登る予定のヴァイスミースの拠点になる場所だ。そこで

ロープウエからサーズグルトン の村を見下ろす



ぼくはとりあえずホーサスへ行ってみようと考えた。ホーサス行きのロープウエはまたバスで一駅戻って、サーズグルトンというところから出ているという。バス停に引き返すと、ちょうど自分が乗ってきたバスがフィスプへもどると



ドーム(四五四五メートル)を中心とした展望台からの眺め

いが、ドームなどたくさんの四千メートル峰が白く輝くヴァイスミース(四〇二三メートル)頂上



ころだったのだから飛び乗った。サースグルトンまで下って、そこからロープウェイを乗り継いでホーサス三三〇〇メートルまで来た。こゝも素晴らしい展望台だった。

途中は曇って山など全然見えなかつたが、雲が晴れて、青空というわけにいかない。目の前に広がっていた。少し右に目を転じるとヴァイスミースも見えている。

解けかかった雪の残るハイキングコースを歩きヴァイスミースが良く見えるとこまで歩いた。やはり完全に天気が回復したわけではないので、見えていた

ヴァイスミースが一瞬のうちに雲の中に姿を消してしまふ。でも、すぐにその姿を表してくれ。よく見ると氷河のわきにはつきりしたトレースが見え、そこを何組かの登山者が下山して行く様子が見えるのである。ヴァイスミースの方は今日は登山可能だったようだ。少ししか離れていない場所なのに、一方ではアリランホルへのアプローチのロープウェイさえ動いていないというのは、それほどアルプスの天気が複雑だということだろう。



写真の真ん中の雪の上の豆粒のような黒い点々が下山する人ですがあまりよく見えませんね

ことだろう。

ぼくは登山者の様子が、もっとよく見える下山口(登山口)のちかくまで行ってみた。見てみると比較的近い場所にクレパスがあるらしく、登山者がその場所を飛び越えるしぐさまで見え、おもしろかった。

ヴァイスミースは明後日登る予定なので、そのト

レースを目でたどっていた。トレースはある程度の高さまで登ると、左側から右側へ氷河をトラバースしているようだ。霧ではつきりとは見えないが、この上部のトラバースがどうやらこの登

山の核心部のようだ。トラバースを終え、右のヴァイスミースの肩の部分まで出れば、あとは問題はないうつだった。こんなことを想像していたら登山意欲が増してきた。

魔が差したのか？

再びサースグルトンまでロープウェイで戻ったところ、ちょうどバスが一台停まっていた。フィスフ行きだったのだが、一瞬考えて、ぼくはこれに乗り込んだのだ。山に登るためにはサースフエに泊まらなければならないことは百も承知なのに、その反対方向のバスに乗り込んでしまったのだ。後で考えると、こゝいつの魔が差した

牧場から帰ってきて、バーンホフ通りを行列して過ぎる民俗衣装を着た少年たちとヤギの群



というのだと思う。この行動が、それから後のスケジュールをすべて狂わしたしまったのである。

とにかくサースフエの山には一切登らず、ツェルマツトに戻ってきてしまった。明日はどうしよう？

そこで、これも日本でも考えていた計画だが、ゴルナーグラート三〇八



九メートル)へ登山電車で行って、ツェルマット(二六二〇メートル)まで下ってくるハイキングに予定を変更することにした。そう決めると、少し落ち込んでいた気持ちが上がってきた。

七月十五日(日)、朝の登山鉄道の乗客は、八割ぐらいは日本人だった。ハイキングに出発する前に展望台に上がってみることにした。ゴルナーグラート氷河とマッターホルンの展望が素晴らしい。

下ってくる道の横が岩場になったところで、初めてアルプス

の野生動物アイベックと出会った。それを写真に収めることができた。「おーい、まってくれ」と言いながら、あわててカメラを出す日本人もいたが、生き物だから都合よく待っていてはくれない。たちまち急な岩陰に消えた。(続く)

あまりにもタラタラしてしまったので、この連載はあと一回で終わりにします。七月に再度スイスへゆきますので、稿を改めたいと思

八十歳のエウエレスト登頂と六七歳の タウラギリの遭難、そしてよもやま話

時を前後して二つのヒマラヤ登山が大きな話題になった。一つは三浦雄一郎氏の八十歳 世界最高齢でのエウエレスト登頂である。その成功は、快挙としてメディアを通じて、大々的に報じられた。政府・自民党も何らかの表彰をしようという動きもあるようだ。もともと、この政府は先の「長嶋 松井」国民栄誉賞を見るまでもなく、国民受けするものなら、その立場をい何でも政治利用することを常としているから別に驚きはしないがね。

ところで、いったいななんだ、南(こうせつ)は「安倍が自分のコンサートで歌ったという、あのうれしそうな顔はよ。時の権力者が自分の「コンサート」にすることを恥だと思わないのだろうか。第一、チケットを買って「コンサート」にきてくれたお客さんに申し訳ないと思わないのだろうか。権力者に「コンサート」を政治利用されたことを……。フォーク歌手ってのは反戦反権力ではなかったのか。この考えはちょっと強引で古いかな。フォーク歌手もずいぶん様変わりしたもんだ。オレは二度と「神田川」なんて歌わないぞー!

三浦氏の登頂を賞賛するとは、ぼくも異論はない。だがしかし、河野千鶴子(六六歳)さんのタウラギリ遭難の「コース」に接することで、三浦氏の「これまでのテレビ報道の画面からいくつが気になっていた点」が、ぼくの中で俄然大きく膨れ上がったのである。

河野さんは一人のシェルパと三人でタウラギリ登頂を目指した。生還したシェルパ二人は遭難死によれば、頂上まであと二二〇メートルのところまで体調が悪くなり引き

返したが、七六〇メートルくらいで力尽きたという。

一人の登山愛好家として考えた場合、河野さんのようなスタイルの登山が断然好きだし、登山とはそういう静かなものだと思つた。ぼくも山行のほとんどが単独行だから余計に共感を覚えるのだ。「このスタイルの登山の視点から三浦氏のエウエレスト登山を考えると、その違いの大きさに驚く。

まずその陣容がすごい。現地スタッフ十八名を含め総勢二十七名。予定期間が約「一月半あまり」MURA EVEREST「より」。これだけの陣容を「これだけの期間支えるには相当な資金が必要だろう。予算が一億円を超える。これは別のサイトから」というからすごい。当然個人でまかなうのは不可能だろう。スポンサーが何社もついたようだ。テレビ画面を見ていて気になった「一」が「この点」だ。その代表が羊羹と抹茶だったが、その数は「こんなものではな

いよ。サントリーなどは喜んだだろうな。しばらくはどのテレビも「三浦一色」で、メディアの扱いも別格だしね。登山途中の様子が時々放映されていたが、ぼくにはなかなか三浦氏がガイドやサポート隊に手とり足とりされ登っているように見えてしかたがなかった。

ネット上では三浦氏が極度の疲れと、アイスフォール通過が危険になったため、二、六千五百メートルから入り「ブター」でペースキャンブまで戻ったことで、登頂とは認めないという意見もあるようだ。この点は、ぼくはそうは思わない。登頂を果たしたことは間違いないことだ。

だがね、登山するのはスポンサーのために喧伝して、注目を浴びてやるものだろうか。ぼくはあくまでも登山といっつのは自分が登りたいから登のだと思つた。だからなるべく「こじんまりと静かに登るのが本来の登山の姿だと思つた。河野千鶴子さんの「冥福をお祈りします」。